

2016年3月8日掲載

「当たり前からの脱却」

2月上旬に体調を崩し、喉が腫れてしまった。どんなに頑張っても声が出ず、電話や会議もできないほどだった。私は講師や司会など話す仕事をしているため、声が出ないことで仕事先にも迷惑をかけてしまった。

私の中では「声が出ることは当たり前」だった。しかし、それが当たり前ではなくなったときに、食事や睡眠、歩くことなども含めて、普段何気なく行っていることのありがたさが身に染みわたった。そして「当たり前」ではなくなったときに何をすべきかを考える機会にもなった。

3月は卒業式や異動などがあり、別れの季節でもある。これまで当たり前のようにともに過ごした仲間との別れもあるが、新年度の4月には新たな出会いもある。常にそばにいた人がいなくなると不安になるかもしれない。しかし、変化は次への新しい一歩を踏み出すために必要なことだと感じている。

例えば経営。「当たり前だからやらなくて良い」としてしまうと、新しい発想は生まれてこない。思考の枠を外すことでよりよいサービスや商品が生まれ、企業の発展につながっていく。

大切なのは、「当たり前」ではなくなったときに現状をしっかりと受け止め、「ではどうするか」と次の一手を見据えることだ。過去は変えられないが、自分次第で未来は自由に創れる。

人生、突然何が起きるか分からない。今の自分があることに感謝し、そのために今を大切に生きていきたい。

(毎日新聞より)